

第1回  
県立高等学校あり方検討会  
議事録

令和2年8月24日(月)  
高校教育課高校魅力化推進室

### 【事務局】

○皆さん、こんにちは。定刻となりましたので、只今から第1回県立高等学校あり方検討会を開会します。本日の司会進行を務めさせていただきます、高校教育課の岩本でございます。よろしくお願いいたします。

本日の日程は、資料の1ページでございます、会次第に沿って行い、15時20分までには終了予定としておりますので、御協力をよろしくお願いいたします。それでは、まず始めに古閑教育長がご挨拶を申し上げます。

### 【古閑教育長】

○皆さんこんにちは。ただ今、御紹介を頂きました、教育長の古閑でございます。

まず、第1回の県立高等学校あり方検討会に先立ちまして、一言御挨拶をさせていただきます。本日は大変暑い中、また大変お忙しい中、御出席を頂きましてありがとうございます。また、この県立高等学校あり方検討会の委員の就任を快くお引き受け頂きまして、厚く御礼を申し上げます。

さて、県立高等学校の再編整備につきましては、平成19年に基本計画を策定し、これに基づいて様々な取り組みを実施してきました。この計画では、少子化と相まって学校の小規模化が進む中で、生徒達の教育環境を確保する観点から、学校の再編統合を進めてきたところであります。平成30年度をもって計画は終了し、小規模校の減少や、特色ある学校づくりが進むなど、教育環境面での向上が図られたところであります。

ただその一方で、熊本市以外の地域を中心に、定員割れが続いている状況があります。また、社会の高度情報化やグローバル化、生徒の多様化など、高校教育を取り巻く環境は大きく変化をしております。特に最近、教育分野におけるICTの活用が進んでおりますが、今回の新型コロナウイルス感染の拡大を契機に、ICTを活用した教育の必要性が更に認識されるようになっております。また、以前にも増して、地域における高校が果たす役割について期待が高まるなど、地域と連携した学校づくりの視点が重視をされております。

このように、前回の再編時からの状況の変化を踏まえ、将来に向けた魅力ある県立高校、学校づくりを考えていく必要があると考えております。このため、この会議におきましては、まずこれまでの再編整備の成果と課題の整理を行っていただきます。そのうえで将来を見据え、概ね4年間の魅力ある学校づくりに向けた様々な取り組みについて、御検討、御協議をお願いしたいと考えております。委員の皆様方におかれましては、それぞれの立場から忌憚のない御意見を賜りたいと思っておりますので、よろしくお願いいたします。簡単では

ございますが、冒頭の御挨拶とさせていただきます。よろしくお願い申し上げます。

【事務局】

○次に、本日の出席者を御紹介します。まず、今回出席いただいた、委員の皆様を御紹介します。御手元の資料4ページをご覧ください。

熊本県立大学学長、半藤委員でございます。

○よろしくお願い致します。

○熊本大学熊本創生推進機構地域連携部門准教授、田中委員でございます。

○田中です、よろしくお願い致します。

○熊本県産業教育振興会会長、足立委員でございます。

○足立でございます。

○熊本日日新聞社編集委員兼論説委員、小多委員でございます。

○小多と申します。よろしくお願い致します。

○熊本県議会教育警察常任委員会委員長、橋口委員でございます。

○はい、よろしくお願い致します。

○熊本県町村教育会会長、吉永委員でございます。

○はい、よろしくお願い致します。

○熊本県都市教育長協議会会長、末次委員でございます。

○はい、末次でございます。よろしくお願い致します。また今回の豪雨では大変御世話になっております。お見舞い等に対しまして心から御礼申し上げます。今後ともよろしくお願い致します。

○熊本県公立高等学校長会会長、越猪委員でございます。

○はい、越猪でございます。どうぞ、よろしくお願い致します。

○熊本県私立中学高等学校協会会長、内村委員でございます。

○内村です、よろしくお願い致します。

○熊本県中学校長会副会長、音光寺委員でございます。

○はい、音光寺です。どうぞよろしくお願い致します。

○熊本県公立高等学校PTA連合会会長、夏木委員でございます。

○夏木です、よろしくお願い致します。

○一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム地域教育魅力化コーディネーター、奥田委員でございます。尚、奥田委員につきましては、本日オンラインでの参加となります。

○本日はオンラインでの参加とさせていただいております、奥田と申します。よろしくお願い致します。

## 【事務局】

○次に、本検討会の教育委員会関係者につきましては、資料5ページの名簿をもって紹介に代えさせていただきます。

それでは、日程説明に移ります。事務局より本検討会の全体日程の説明をお願いします。

○高校教育課の野田と申します。よろしく申し上げます。

次第の6ページをご覧くださいと思います。こちらに、あり方検討会の今後のスケジュール等についてまとめております。本検討会は来年2月までに計4回の会議と学校視察1回を予定しております。本日第1回の会議におきまして、再編整備計画の実施状況と課題、および今後の県立高校のあり方と魅力づくりについて御協議いただきたいと思いますと考えております。その後10月中旬に学校視察を行い、10月下旬に第2回会議を開催し、県立高校のあり方と魅力化の方向性について中間報告をとりまとめていただきたいと思いますと考えております。さらに来年1月に第3回会議そして2月に第4回会議を開催し、報告書を完成していただくという流れになっております。厳しい日程の中での協議となりますが、本検討会での協議を受けて、来年度以降、県立高校の魅力化に取り組んでいきたいと考えておりますので、どうぞよろしく申し上げます。

○次に本検討会の設置要項及び運営要領（案）について高校教育課、松村室長が説明します。

○皆様こんにちは、高校教育課の松村でございます。よろしく申し上げます。

早速ですが、本検討会を開催するにあたり設置要項および運営要領（案）を皆様にお示しし、今後の協議を進めてまいりたいと思います。委員の皆様には事前資料として配付させていただいておりますので、ここでは主要な部分のみ説明をさせていただきます。それでは、設置要項について資料の7ページをご覧ください。

まず第1条に本検討会の目的と設置について記載しております。再編整備後の現状と課題を踏まえて、県立高等学校のあり方及び今後の取組みの方向性について検討するため、県立高等学校あり方検討会を設置するとしております。第2条には検討会の所掌事務としまして、「検討会は熊本県教育長の依頼により次に掲げる事項について協議する。（1）県立高等学校再編整備等基本計画による再編整備の成果と課題について（2）県立高等学校のあり方及び今後の取組

みの方向性について、第2項としまして、「検討会は協議の結果を取りまとめ、教育長に報告する。」としております。また会長及び副会長について第5条に「検討会に会長1名及び副会長1名を置き、議員の互選によりこれを定める。」としております。以下第9条までを設け、附則として「この要項は令和2年、2020年7月30日から施行する。」としております。

次に資料の8ページをご覧ください。運営要領(案)について御説明をします。こちらは検討会の会議に関する事務手続き等について定めたもので、いくつか項目がございますが、ここでは2点のみ御説明します。まず、項目第3の会議へのWeb会議システムを利用した出席についてです。本日もWeb会議システムを利用した参加を頂いておりますが、今後も新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、Web会議システムの推奨が継続されると考えております。そこで(1)にありますように、「委員は、委員長が認めるときは、Web会議システム(中略)を利用して会議に出席する事ができる。この場合において、Web会議システムによる出席は、あり方検討会設置要項第6条第2項に規定する出席に含めるものとする。(後略)」と定めております。

また、次の9ページをご覧ください。第5の会議の公開・非公開の決定についてです。「(1)審議事項等についての会議の公開の可否は、原則として会議の冒頭において議決する。(2)非公開とされた事項は、原則として、公開とされた事項の審議等が終了した後に審議する。」と定めております。以上の内容により本検討会の設置要項と運営要領(案)としたいと思っております。よろしくお願ひします。

○只今、事務局より説明しましたが、設置要項及び運営要領(案)につきまして、御質問等はありませんでしょうか。

それではこちらの設置要項及び運営要領(案)に基づき検討会を進めてまいりたいと思っております。

次に会長および副会長の選任を行います。ただいま説明にありましたように、設置要項第5条第1項により、会長および副会長の選任は委員の互選となっております。委員の皆様から御意見はございませんでしょうか。

御意見がないようですので、事務局から提案させていただきたいと思っておりますが、よろしいでしょうか。

それでは、会長に半藤委員を、副会長に越猪委員をお願いしたいと思います。いかがでございますでしょうか。

(拍手)

ありがとうございます。半藤委員を会長に、越猪委員を副会長に決定させて

いただきます。会長、副会長におかれましては、それぞれの席に御移動をお願い致します。

それでは半藤会長に御挨拶を頂き、引き続き、今後の議事の進行をお願い致します。

#### 【半藤委員】

○皆様こんにちは。県立大学の半藤でございます。

まずは、熊本豪雨で被災された皆様に御見舞を申し上げます。今般のコロナ大災害は教育の世界に多大なる困難を強いております。インターネットによる遠隔授業など、副産物はありませんが、ふれあいを基本とする教育の根幹を揺るがす意味で、大変な問題であると考えております。大学入試にかかる国の教育行政が迷走しておりますけれども、古閑教育長からもお話がありましたように、初等・中等・高等教育を含めて、少子化を巡る現状認識、またICTを使った教育の方向性など、今議論されていることは概ね十分理解できるところでございます。教育の改革改善に重要なことは、具体論と、そしてその推進力であると考えております。この場の議論が有効なものになりますことを期待申し上げます。冒頭の御挨拶とさせていただきます。どうぞよろしくお願い致します。

それでは早速、議事に移りたいと思いますが、進行の都合上、まず先ほど事務局から御説明がございました資料8ページの運営要領(案)につきましては、設置要項第9条により会長が定めることとなっております。よってここで(案)を外し、正式な運営要領としたいと思っております。

それでは、初めに会議の公開・非公開について協議したいと思っております。事務局から御説明をお願いします。

#### 【事務局】

○先ほど申し上げましたとおり、この検討会は資料8ページにございます運営要領第5の規定に則り、関連する協議内容に応じて、冒頭で公開・非公開の協議をしていただくこととしております。また、資料10ページにございます、審議会等の会議の公開に関する指針第3の規定に基づき、本検討会は公開により開催させていただきたいと考えております。

#### 【半藤会長】

○ただ今、事務局から御説明がありましたとおり、本日の検討会につきまして

は公開としてよろしいでしょうか。

それでは、公開とすることに決定をします。

次に、協議依頼事項についての御説明を事務局からお願い申し上げます。

#### 【事務局】

○それでは協議依頼事項について御説明します。

資料の12ページをご覧ください。まず、依頼事項の前段部分では、平成19年10月に策定し、平成30年度をもって完了しました県立高等学校再編整備等基本計画について記載しております。

再編整備においては、少子化の進行とそれに伴う県立高等学校の小規模化という状況の中で、高校段階で求められる教育環境の確保の観点から、再編統合を進めてきました。その結果、学校数が61校から50校になるとともに、当時の基本計画の中で、1学年4学級と定めた適正規模の下限を下回る学校数が減少しました。また併せて、通学区域の拡大や特色ある学校づくりを実施し、教育環境の整備を図ってまいりました。

中段から後段にかけては、再編整備後の状況や高校教育を取り巻く環境について記載しております。

さらなる少子化の進展による生徒数の減少等により、県立高等学校の定員割れが進んでいる状況の中、一方では、地方創生の観点から、県立高校が地域コミュニティの核として果たす役割に期待が高まっており、新しい学習指導要領では、社会に開かれた教育課程を理念として掲げ、これまで以上に高等学校が地域と連携・協働した教育を充実させることの重要性が増してきています。

また、新型コロナウイルス感染症への対策を契機に、今後、県立高等学校において、ICT環境の整備が進められる見込みであることや、高度情報化の進展、社会経済のグローバル化など、高校教育を取り巻く環境が大きく変化する中で、高等学校教育には、新しい社会に対応し活躍できる能力・資質を持った人材の育成が求められています。

国においては、地域社会や高等教育機関等と連携等による将来の社会像や地域像を見据えた高等学校教育の推進や普通科改革等、学科のあり方などについて検討が進められており、こうした国の動きも踏まえて、本県高等学校教育のあり方も考えていく必要があります。

以上のような状況に鑑み、再編整備後の現状と課題を踏まえて、県立高等学校を取り巻く環境の変化や課題に対応すると共に、県立高等学校で学ぶ全ての高校生が夢に挑戦できる魅力ある学校づくりを進め、新しい時代を自ら切り開いていく人材を育成するため、県立高等学校のあり方及び今後の取組み（今後を見据えた概ね4年間の取組み）の方向性について協議を依頼することとします。以上が、協議依頼事項でございます。

【半藤会長】

○ただ今、御説明がありました協議依頼事項につきまして、何か御質問がございましたらお願いします。

国で特に言われているのは、普通科をより魅力的なものに改革していくということが大きな柱になっているようですけれども、そういったことを含めまして、熊本県の高等学校のあり方等も議論していくということだろうと思います。何か御意見等ございませんでしょうか。

それでは只今の協議依頼事項に基づきまして、協議を進めていきたいと思えます。

次に再編整備計画の実施状況及び県立高等学校の現状等について、事務局より御説明をお願いします。

【事務局】

○それでは、説明に入る前に本日の議題について御説明したいと思います。

まず議題3で再編整備計画の成果と課題や県立高校の現状を御説明します。そしてそれを踏まえて、次の議題4で高校のあり方と今後の取組みの方向性について御協議いただくことにしております。本日は、特にこの議題3を中心に御協議いただき、今後の取組みの詳細につきましては、次回改めて詳しく御協議いただきたいと思いますと考えております。

それでは、資料1の県立高等学校再編整備等基本計画の成果と課題について概要をご覧ください。なお、最終的な検討会の報告書としては、データ等も付け加えて取りまとめ、報告書を作成する予定でございます。本日は、この概要版を用いて説明させていただきます。それでは資料2ページをご覧ください。

資料左の列に再編整備計画の概要を記載しております。再編計画は前期、中期、後期、後期球磨地域の4期に分けて実施しました。計画策定の視点としては、学校の小規模化が進む中、高校段階で求められる教育環境を確保することを最も重視しています。主な内容は、通学区域や学区外枠の拡大、適正規模、特色ある学校づくりの導入、そして県立高校の再編整備の4点です。この4点について、それぞれ実施状況、成果と課題、今後の方向の事務局案をまとめております。順番が前後しますが、まず、高校の再編統合から御説明します。

中央の列をご覧ください。再編統合にあたっては、学校の適正規模を上限8学級、下限4学級と考え、これに基づいて進めてきました。この背景には、小



規模校では選択できる科目が制限されたり、部活動や学校行事に制約が生じたり、自我をつくり上げるための機会が限られるといった考えがありました。それぞれの実施状況は記載のとおりでございます。

右の列に、再編統合の成果と課題をまとめています。成果としては小規模校の減少のほか、切磋琢磨する機会や部活動が維持されるなど、教育環境の向上が図られ、履修科目の選択幅も拡大しました。課題としては、地元の中学卒業者の減少や熊本市など他地域への流出により、定員を満たしていない状況がございます。また、生徒数の減少に伴い、職員が減少する中、多様な選択科目を開設することが難しくなっております。

3ページをご覧ください。今後の方向の部分ですが、この箇所につきましては委員の皆様にも事前にお送りした資料から修正を行っておりますので、御確認ください。

先ほど小規模化の課題について述べましたが、近年、遠隔授業等ICTを活用することで小規模校の課題を解消し、教育の充実を図ることができるようになってきております。また、地域との連携による学校づくりの視点がより重視されるようになっております。

さらに、本県の中学校卒業者の推移については、資料2をご覧ください。

資料2の県立高等学校の現状について、1の部分ですが、中学校卒業予定者の推移を見ますと、平成元年に約2万9千人いた卒業生が、令和2年は約1万6千人と、その間に約1万3千人、約45%減少しております。一方、今後の推移を見ますと、来年は一旦1万6千人を割りますが、その後回復し、令和9年まで1万6千人台を維持する見込みでございます。

資料1の3ページにお戻りください。こうした状況から事務局としては、再編統合から当面は、社会や地域のニーズに応じた魅力ある学校づくりに向けた取り組みを進めていきたいと考えております。

次に中央の列の大規模校の適正規模です。計画では、大規模校では人間関係の希薄化や学校運営上課題があるということから、1学年10学級の学校を漸次9学級まで削減していくこととしておりました。しかし、10学級の学校が所在する熊本市を含む県央学区の中学卒業生数が、途中、市町村合併もあり、再編計画策定時の見込みよりも増加していることから、削減しておりません。また、当初懸念された大規模校の課題についても、特段問題は生じていないと聞いております。こうした状況であるため、今後の学級減については、中学卒業生数の動向を見極めつつ、検討していきたいと考えております。

続いて4ページをご覧ください。通学区域の拡大については「将来的に全県一區化を視野に、各地域の一層の特色化を進めながら通学区域を段階的に拡大する」という考えのもと、平成22年度にそれまでの8学区から3学区に統合

拡大しております。資料の右上に拡大の状況を図示しております。学区拡大により学校選択の幅が拡大した一方で、旧宇上学区から熊本市内への流出が増加しています。今後の方向としましては、さらに拡大を行った場合、旧熊本学区の高校への受検者の増加が予想され、旧熊本学区以外の地域で、定員割れが一層進む恐れがあることから、全県一区化については、今後の受検者の動向を見極めていくこととし、当面さらなる拡大は行わない予定です。

次に、学区外枠の拡大について御説明いたします。資料の中央の列をご覧ください。通学区域の線引きによる不公平感を緩和するため、コースを除く普通科について、学区外から入学できる枠を13%に拡大しました。計画では、平成24年度以降に20%まで拡大することとしていましたが、これについては、熊本市内の普通科7校の学区外合格者数の割合を見ると、平均8%前後で13%を大きく下回っていることから実施しておりません。13%への拡大により、希望する生徒の学区外から進学できる学校の幅が広がりました。一方で、熊本市以外の高校の定員充足率が低下傾向にあります。そこで、今後の方向としては、当面、さらなる枠の拡大は行わず、中学卒業生数や熊本市内普通科7校の学区外枠合格者の状況などを注視していきたいと考えております。

続きまして5ページをご覧ください。特色ある学校づくりについて、御説明します。再編整備を実施する中で、新しいタイプの学校の導入を、合わせて進めてまいりました。

まず、併設型中高一貫教育を宇土・八代・玉名の各校に導入しました。導入の成果としては、先取り学習や少人数指導が学力の向上につながり、難関大学への合格者が増加するなど成果があがっています。また、体験活動や探究活動も充実しました。課題としては、当初3倍を超えていた受検倍率が低下してきていることがうかがえます。また、学習習熟度別の授業や個別の支援を必要とする生徒への対応など、一層のきめ細かな対応が必要となっております。このため、今後の方向としては、3校それぞれの特色ある教育活動を進めるとともに、例えば、一学級定員の見直しなどによるきめ細かな体制づくりを検討する必要があると考えております。なお、各校とも実績を上げていますが、県内の生徒数が減少している、増えない状況にあるということから、新たな中高一貫教育校の設置は考えておりません。

このほか、新しいタイプの学校づくりとして、総合学科や総合選択制の導入を行っております。また、6ページに記載しているとおり、単位制も導入しております。総合学科は、普通教育に関する科目から専門教育に関する科目まで幅広い選択科目を開設し、生徒が進路目標に応じて、教科を選択できることが特徴でございます。また、右の列に記載している総合選択制では、生徒が自分の学科以外の学科コースの科目を選択履修し、進学や就職試験に役立てること

が可能です。本県では、再編統合後の新設校7校に導入しております。

6ページをご覧ください。単位制は、学年による教育課程の区分を設けず、決められた単位を修得すれば卒業が認められる制度で、生徒が自分の興味・関心等に応じた科目を選択できます。それぞれ選択科目の幅を広げる制度であり、生徒1人1人の希望に沿った学習が進めやすくなるメリットがあります。その一方で、多くの選択科目を準備する必要があることから、生徒の減少に伴い、教職員が少なくなっている高校では負担が大きくなっている状況にあります。そのため、今後の方向としては、当面は導入済みの高校において、生徒の特色を生かした教育のさらなる充実に努めてまいりたいと考えております。

最後に校舎制についてですが、阿蘇中央高校と天草拓心高校で導入しています。2つの校舎の施設・設備を有効に活用するとともに、阿蘇中央高校では、校舎間移動による総合選択制の授業を設け、生徒の進路選択の幅が広がっております。また、天草拓心高校では、校舎間移動による部活動を実施しております。課題としましては、校舎間の移動に時間がかかることや、対面と比べて校舎間で職員の意見交換の意思統一が難しいことや、管理職や事務部門の負担が大きいといったことが挙げられます。今後は、ICTの活用などによって移動の負担を軽減する方法等について研究・検討していく必要があると考えています。

以上が、高校再編整備の成果と課題についての説明です。説明は長くなりますが、県立高等学校の現状につきましても、続けて説明させていただきます。

資料2をご覧ください。1の中学校卒業予定者の推移につきましては先ほどご説明した通りですが、全体としては、現在の小学校3年生まで、つまり令和9年まで1万6千人台を維持する見込みです。また、中央の表は学区別の推移を表したもので、県南学区では減少が進む見通しでございます。

2をご覧ください。県立高校全日制課程50校の種別ごとの内訳を記載しております。このうち、「普通科」の「普通・コース」というのは、英語コースや体育コースなどを指します。「普通科・専門学校併置」というのは、例えば普通科と商業の専門学科などが併置された学校です。単位制では、「普通科・単独」は八代清流高校、「普通科・商業科併置」が湧心館高校、「総合学科・単独」は翔陽高校と牛深高校です。

2ページの(2)は、定時制の内訳でございます。(1)の全日制課程をご覧くださいと、普通科・普通系学科の割合が56.6%、職業系学科が39.9%、総合学科が3.6%となっています。このページの一番下に、全国との比較を載せておりますが、全国平均では普通科と普通系専門を合計しますと70%近くになりますが、本県は約57%です。本県は職業系学科の比率が大きく、特に農業の割合が大きいのが特徴でございます。

次の3ページの「3. 県立高校（全日制）における定員割れの状況」をご覧ください。定員割れの人数が、増加してきているのがわかります。また、一番下の（2）の表は、旧学区別の状況ですが、旧熊本学区以外の充足率は70%程度で、特に阿蘇学区・天草学区が低いことがわかります。

次に、4ページの一番上の表をご覧ください。近年の充足率の推移です。近年は、生徒数が減り続けてきたことを反映し、充足率も低下しております。4の「公私立高校募集定員及び入学者比率」をご覧ください。県立高校と私立高校の比較ですが、令和2年度の県立と私立の定員の比率は、県立が1万1240人に対し、私立が6,260人で65:35程度となっております。県立の入学者は、平成24年から令和2年にかけて、2千人ほど減少しております。

続きまして5ページは、生徒募集定員との推移を公立と私立の比較で示したものです。「募集定員」、「第1学年の実員・定員充足率」のいずれも私立の比率が大きくなってきている状況でございます。

以上、再編整備計画の実施状況及び県立高等学校の現状について御説明いたしました。再編整備の成果と課題のまとめ方や、今後の方向、事務局案などについて、委員の皆様から御意見を申し上げます。事務局からは、以上でございます。

#### 【半藤会長】

○ありがとうございました。県立高等学校の再編整備計画と基本計画の成果と課題について御説明をいただきました。これまでの歩みの総括及び今後の方向性が、示唆されたものと理解しております。概ね、全体像や体制の改革ということではなくて、各校の教育課程の魅力化を中心課題とするというお話だったかと思いますが、是非ここで、委員各位から様々な御意見または御質問等をいただければと思います。

資料には、特に今後の方向性について、事務局案ですとか、たたき台が示されているところがございます。再編統合については、当面さらなるものは行わず、学校づくりに傾注するということでしたし、通学区域の見直し等も特に考えず、学区拡大についても今後を見据えていくということであり、中高一貫教育校の新たな設置も当面行わないということです。その中で、特に大規模校についても、再編整備計画では1学年10学級の学校については、9学級まで削減していくという考え方がありましたが、それも現状を鑑みると、すぐさまそういう方向性ではなく、様子を見ていくということです。

あえて、議論を起こすことを考えれば、再編整備計画では、数値が出ていたということから、数値目標のようなものを考えなくていいのかとか、いろんな

論点はあろうかと思います。

ということで、御説明等を踏まえていただきますけれども、それを列挙する形で各委員の課題意識等でも構いませんので、お話いただければと思います。

**【音光寺委員】**

○菊池南中学校の音光寺です。質問をよろしいでしょうか。

2ページ目の「再編整備の後の成果と課題」のところです。成果について、質問したいのですが、丸の4つ目です。「普通科と専門学科の併設による進路選択幅の拡大」と書いてあるのですが、再編統合してから進学率や就職率が整備前に比べてどう変わったのか、向上しているのか、横ばいなのか、具体的に知りたいです。

また最近、私が中学校側として気になっていることが、新たな学科が出てきているにも関わらず、その学科が定員割れをしているという部分が、中学校側からとしては気になりますので、そのへんをお答えいただければと思います。

**【半藤会長】**

○事務局から御説明をお願いします。

**【事務局】**

○高校卒業後の進学・就職ですが、再編直後については、確かに少し上がっております。ただその後、横ばいというか、それほど低くなっているわけではないですが、どちらかと言えば横ばいという状況です。新たな学科・タイプの学校等入れておりますけども、そこについては、学校によって少し差があるのかなというところは感じております。

**【半藤会長】**

○よろしいでしょうか。お願いします。

**【吉永委員】**

○町村教育長会の会長の吉永です。先ほど説明がありました3ページ左上に「今後の方向、事務局案」がございます。その中の2つ目のポツに「ICTの活用と小規模校の課題を解消し」とございますが、今度のコロナウイルスの感染症

によりまして、小・中学校、高校もですが、休校を余儀なくされました。その関係でICTが事前に準備されている、または整備されている学校については、端末をそのまま持ち帰って、色々なことや、授業を補うことができているということですが、すべての学校ではありません。国の方針等により、義務制の学校は、端末や環境整備が前倒しになりましたので、今年中には、学校内の環境を整えば、どんどん進んでいくのだろうと思います。

一方、県立高校のことは、少し触れてありますけども、私もよくは分からない状況です。ICTの活用を県立高校がどのように進められているのか。それから、私が住んでいる県央学区の県立高校を見ると、いずれも生徒数が減っており、小規模校という学校が非常に多いですが、そのへんの課題は、小規模校でこれからもあると思いますけども、その課題は地域によってどのように解消していける計画なのか質問します。

#### 【半藤会長】

○このあたりは、高校の先生方から情報をいただければと思いますので、副会長の越猪委員に、県立高等学校のICTや、コロナで急速に拡大したICTを活用した教育等についての状況をお話いただければと思います。私学の立場から内村委員も御発言いただければと思います。よろしくをお願いします。

#### 【越猪委員】

○県立学校の現状について、お話をさせていただきたいと思います。

県立学校のICT環境整備につきましては、県教育委員会の方針のもと、段階的に先を見通した整備が進められているところです。各学校におきましては、各学校の現状の違いは、当然出てきています。

以前、教育委員会で民間のいろんなICTのコンテンツを配信する、そういう会社といろんな連携をされたり、また学校が独自で作成したコンテンツを利用したりしながら、この4月、5月の2か月間に対応したところです。県教育委員会の方針と各学校の取り組みが上手にシンクロしている学校については、生徒の学びがある程度は保障できたとは思っていますが、まだまだ、これは全国的な課題でもありますので、今後とも各学校がそれぞれの生徒に合った環境整備や教え方も含めてですが、研究をしていかなければならないと考えているところです。

### 【内村委員】

○ルーテル学院の内村と申します。

私学の場合には、学校によって差があるということが正直なところですが、早くからICTを、要するに端末を持たせた学校もあれば、来年度ぐらいから持たせる学校というように、何とか揃えようという状況ではあるのですが、端末を利用すると必然的に納付金が上がるといった問題が生じてきて、なかなか経済的な状況から厳しいということもあります。ただ、本校なり他の学校もそうですが、コロナの今年度においては、できるだけスマートフォンに配信できるような方法を取り、コンテンツを整備、作成して、Zoomを使いながらホームルームのようなことから何からすべて行ったのが実情です。

その中で特に各学校とも迫られたのは、現実的なことを申しますと、何人かの保護者からは「授業はあってないのに授業料を取るのか」という厳しい御意見もあるのが実情です。これは大学では新聞等でもあったのですが、私学の中・高でも起きていることで、そういう事に関しては、きちんとした学習の保障をやっていかざるを得ないということです。

ついでに付け加えておきますと、最近私学の課題として、県立においても同じであるかもしれませんが、いろんな形の学校が授業の魅力あるいは学習内容を魅力化するためには、それなりの財政的基盤を持たないとやっていけないということです。それからもう一つは、なかなか学校に毎日通えない子たちに対して、通うことにおける多様化を受け入れるような学校、つまり通信制が非常に大きな力を持ってきており、全国的に一番有名なN高等学校とか、クラークとかにおいては、この20年ぐらいで生徒数が10倍などと、ものすごく生徒数を確保しています。なぜこれを課題と申しましたかといいますと、途中で中退してそちらを選ぶ生徒たちが増えてきているのです。例えば、私の学校には附属の中学校があるのですが、中学校から高校にそのまま進級せずにそういうところに進学する。例えば芸能的なことも含めて、色んな特色を与えてくれるところですので、そちらでやりましょうということです。正直言いますと、それよりも大きな問題で、入学する定員だけではなくて在籍数です。途中から中退あるいは転学していくということも、私としては大きな問題であると考えています。

### 【半藤会長】

○ICTの導入につきましては、ハード面でお金がかかるということですので、各方面と調整しながら、鋭意努力中ということかと思えます。機械の導入も大学では一気に進みましたので、予算的には何とかなるにしても、実際に物が足り

ないことなどが実情です。そういう事もあり、学内のコンピューターの容量を大きくすると、別の予算がかかってくるなど、いろんな課題が見えてきています。また大学では、機械化に向けた整備がある程度進んだ後の問題、すなわち3密を避けるために、すべて遠隔授業にするとといった理屈が、なかなか学生にすっとんと落ちない。例えば、父兄あたりが「小・中・高は、学校に通って教育されているのに、大学はなぜ学校に行かずに遠隔授業ばかりやるのか、手抜きではないか」という声があると聞きますし、また学生自身も、自分たちが学びたいことは教科書や書物に書いてあるような知識だけではなく、大学で学ぶことの意味や社会に出ていくうえで必要な身に付けるべき、そういう素養は何かといったことを含めて大学で学びたいのに、遠隔授業になったために、そういうことに触れる機会がないという意見が出るなど、機械化推進とともに、新たな教育上の課題もどんどん出てくるのだろうと推察しています。

熊本大学も、今かなり機械化を進めて、遠隔授業をされていると思いますが、その現状について田中委員、よろしくお願いします。

#### 【田中委員】

〇どうも、ありがとうございます。私が所属する工学部では、幸いなことに学生はパソコンを入学時に買いましょうということは話していますので、割と上手にオンライン授業もできていると思います。最初に会長のほうから触れ合いというのが大事だという話がありましたが、私も土木なのでチームワークが大事ということをよく言うのですが、上級生といいですか、2年生以上は何とかなるのですが、1年生にはコミュニケーションのやり方を最初に色々手ほどきしておかなければ、それをちゃんと教えてないというのは、なかなか厳しいなということがあります。私たちは与えられた環境でやるしかないので、よく「ピンチをチャンスに」と言いますが、オンラインの授業で良いこともいくつかあって、大教室でやっているのと、遠くのほうは見えなかったり、声が聞こえにくいとか、板書が見にくいということがありますが、オンラインでやるとすごくクリアに見えます。最近の若い人はデジタルネイティブというのですが、非常にそのようなことに慣れているのです。私たちの感覚とは違う情報把握の仕方をしてくれたり、すぐスマホで何か調べたり、逆にそれがプラスに出たりすることがあるのかなと思ってしまっていて、悪いことばかりではないと思っています。でも、先生方がおっしゃるように、この状況が長く続くことがやはり厳しいことだと思うのです。私は災害が気になっているのですが、ただでさえコロナで2カ月間止まっていたものが、さらにまた災害で止まり、人吉・球磨が大変だなど思うのです。1年であれば何とか乗り切れるようなことが、来年以降から



常態化すると、親御さんたちの不満やそのようなこともあるのかなと思いますので、何とかこの1年で頑張っって新しい技術を開発して対応したいと思っています。

**【半藤会長】**

○高校や大学のICTをめぐる状況について、今お話をいただきましたが、吉永委員、以上のお話でいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

**【橋口委員】**

○関連してなのですが、今50校ある県立高校のうちで光通信、高速通信が届いていない学校は何校くらいあるのでしょうか。もし可能であれば、どこの高校かも含めて、お願いします。

**【半藤会長】**

○事務局お願いします。

**【事務局】**

○では、主管の教育政策課長にお願いしたいと思います。

**【教育政策課】**

○教育政策課の井藤でございます。

資料を持ち合わせておりませんので、正確なところは分かりませんが、光ファイバーがほとんどの地域、ほとんどの学校で整備はされているのですが、一部光ファイバーが届いていない学校はあります。ただ、そこについても基本的にはネット環境が、一応確保されていて、ただし大容量の通信ができるかどうかについては、今後、拡充等の措置が必要になってくるということでございます。

**【半藤会長】**

○よろしいでしょうか。他に御意見がありましたらお願いします。

### 【小多委員】

○熊日の小多です。1つは適正規模のところなのですが、報道に関わる立場でこの間、断片的に再編整備を見てきたのですが、教育環境を担保していくための大きな1つの目安として進めてこられたのが、この適正規模だったと理解しております。その中で、実際、再編統合しながらも定員を満たさず、結果として適正規模と掲げてきた8学級から4学級という下限の学級数も、なかなか満たせないという現状があるのではと思います。それに対して、今回お話がありましたように、大規模校なのですが、先ほど半藤会長からもありましたように、議論を深めるべきところかなと思います。

御説明の資料では、いわゆる中学卒業者の今後の見込みから、10学級の学校を絞り込むことは今回の議論では、実施しないと御提案があったと思います。しかし、例えば県央学区内においても資料の中で、別のページや別の観点からは県教育委員会からも御指摘があったとおり、旧熊本学区以外の高校は、生徒数の減少があり、実際に定員割れもかなりの割れ方になっており、県央学区内でも非常にアンバランスが出ています。その状況がさらに拡大しないように、全県一区はもう行いませんと御説明があるとするれば、その大規模校の今後の中学卒業予定者の見込みが増えているからということも、もう少し多面的に捉えて、きちんと議論をしておくべきではないかなと思います。

繰り返しますが、適正規模というところが、やはりこの間の高校再編整備の1つ大きな座標軸というか、物差しになったところは否定しがたいところだと思いますので、やはりここは、流れからすると1つポイントかなと思っています。

### 【半藤会長】

○これまでの改革にかかる総括と、それを踏まえた今後の方向性について、どれほど成功しているかと、一部を見て言うことができても、見ていないところもあるのではないかと議論かと思いますが、事務局として見解がございましたらお願いします。

### 【事務局】

○適正規模の考え方についてですが、確かに小多委員が仰いましたように、適正規模を4学級から8学級としています。これは生徒の教育環境の確保の面から、基準自体には今でもその妥当性はあると考えております。下限につきまし

ては、仰ったように弾力的に扱っていきます。また、新たに出てきた背景にICTでどれだけカバーができるか、ある程度その定着を見た上で、場合によっては適正規模が4学級から3学級になるということもありうると思っています。

しかし上限については、確かに前回の計画に書いてありますが、私たちも非常にそこは悩ましいところで、学級減をすることで少なくとも県央学区の中学生の進路を狭めてしまう可能性もあるというところで、中学校卒業予定者数は、いったん少なくなるのですが、また増えていきます。そこを見た上で考えていくべきという結論を今回は出しています。

#### 【小多委員】

○特に再編統合が進んで、地域から身近な高校がなくなった地域の方々、この間のいろいろな議論の中で、地域に高校があることの必要性を受け止められ、その状況や結果を、地域としても受けとめてこられた方々からすると、一方で1つ大きな要素としてあるこの項目については、この項目だけがとっていいのかわかりませんが、この項目が前回の整備計画からも具体化せず、今回も保留ということであれば、もしかしたら今御説明がっている内容よりも、さらに説得力のある御説明がないと、先ほど県央学区については、生徒が増えるのだから、大規模校の学級数を狭めないと言っている意味も分かるのですが、同じ県央学区の熊本市以外の高校については、相当な定員割れの状況が、現実に見て取れると理解しています。

よって、旧熊本学区とか熊本市に限定した学区の捉え方で、同じ議論がなされるのであれば、一定の説得力があるかと思うのですが、同じ学区の中でも非常に極端に定員割れをしている高校が片方で存在している中で、熊本市の大規模校を、特殊性を持って御説明なさっていると思うのですが、熊本市の大規模校に対して、多くの方が納得できる理屈や説明が、もう一つ二つは盛り込まれるべきとは感じています。

#### 【半藤会長】

○ただ今の小多委員の御発言は、これまでの総括という観点で言えば、最も大きな課題として見えてきたものとして、県内郡部の高校の定員割れ、それと連動する市内の大規模校への集中、このあたりがかなり大きな課題として見えており、そういうことを十分踏まえた計画にしていくべきではないかということだろうと思います。このあたりの各委員の課題認識や、最も重要な課題というものがどこにあるのかについて、是非この際聞かせて頂ければと思いますが、いかがでしょうか。

### 【夏木委員】

○高 P 連会会長の夏木でございます。保護者としての意見として、少し言わせて頂きたいと思います。

学校の配置等統廃合の結果は、地域経営に基づいて再編されているものですが、この地域経営への観点というのはあくまで社会的考えです。その中で、どうしても保護者としては、子どもの夢を叶える、より将来性のある、就職や大学進学に対して有利である学校に少しでも行かせたいという二面性がどうしてもあります。ここに大きな差がありまして、本渡から牛深高校に通わせている親御さんにとっては、なぜ牛深なのか、どうしてもそう思ってしまう。そこは、社会基盤として成り立たせる学校の問題と一保護者として子どもの夢を叶えたい、できるだけ負担を減らしたいということは、どうしても並立して、相反している部分ではありますが、存在するのは仕方がないと思います。これに関して、少しでも多くの学校に魅力のある学科であったり、現在、部活動のためにわざわざ越県させて御子様を通わせる保護者も多い中、そういった面の見直しをして、例えばある特定の部活で阿蘇の高校が強いということに通わせるなど、そういう方はいらっしゃるわけですので、考え方によっては、人数が減ってきた中でも達成できる部分はあると思っています。どうしてもそこは保護者として相反する意見ではありますが、少し汲んで頂きたいと考えております。

### 【半藤会長】

○どうぞ、お願いします。

### 【末次委員】

○委員の立場からしますと、大局的に話しなくてはいけないのだろうと思いますが、人吉球磨ということに少し特化してお話をさせていただければと思います。

人吉球磨は、後期再編整備計画の最後に整備され、今年の3月に初めての卒業生を出した学校が2校あります。そういうなかで、先ほど説明がありました資料の5ページの中の新しいタイプの学校づくりということで、総合選択制のお話がありました。この中で、球磨中央高校が地域未来探究科を開設しまして、3年経ち、今年卒業生を出したのですが、たまたま人吉の教育委員会に、地域未来探究科を卒業した生徒が初任者として採用されました。いろいろ話を聞く機会があり、「どうだったこの3年間は？」という話を聞いたり、「どうして地域未来探究科を選んだのですか？」ということもお聞きしたりすると、非常に進路の選択の幅が広がり、先ほど今後の方向性の中で事務局の御説明にもあ

りますが、自分の視野を広げることができた、そういう機会を作ることができたので、この3年間はとても充実して、それを生かして、もともと公務員になりたいという希望があったので、こういう選択の仕方はとても自分としては良かったというようなことを話してくれました。そういう話を聞くと、段々、生徒の志望する数が少なくなっている中、せっかくの良い取組みがしぼんでしまうと総合選択制の意義がなくなってくることが考えられますので、今後の大きな課題として、先ほど事務局からありましたことを充実するためにはどうやっていったほうが一番いいのかということも重ねて、今後の検討課題にして頂くと有難いと思います。

#### 【半藤会長】

○ありがとうございます。

教育というのは基本的に多様性のものだろうと思うのですが、実際に教育を受ける立場からすると、一定のトレンドはあるだろうと思います。学びたい向上心の高い者は、夢が実現する方向にどうしても向かっていく。この流れは決して妨げることはできないだろうと思います。

「故郷」という歌がありますが、あの主人公は、ふるさとから出て行って、夢を果たしていざ帰らんということですが、友達は元気であると呼びかけるわけです。地域から出ていく者とそこに留まる人がいるのですが、留まる理由がいろいろあって、昔なら学力が足りないから、東京や都会には行けない、あるいは、貧しいのでそれは叶わないから地域にいるということもあったでしょう。しかし、段々そういうことがなくなってくれば、やはり教育は視野を広げ、人間関係を広げ、そしてより高い目標をとりなすから、そういう中で、現状が動いているのだろうと思います。そうすると、熊本市の学校の集中問題を考えるとすれば、これは学校の問題というよりは、教育をされたい人達の問題となりますので、その中でどういう施策を考えていくかが大事になり、そこに各学校の魅力化をどう図るかという今般の話に繋がっていくのだろうと思っています。

すなわち、これまでのあり方をきちんと総括し、それに基いた的確なアプローチをとっていくことが一番重要なのではないかと考えています。

#### 【田中委員】

○私をここに呼んで頂いた理由は、多分、地域の側から見た高校のあり方を話すことなのかなと思います。現状と課題ということで、私自身はこの10年間に、天草の仕事をする事が多く、世界遺産になった崎津集落のまちづくりにずっと関わってきましたが、そこでは富津小学校や河浦高校が閉校し、そうい

う小規模校の厳しいところも見てきました。今は上天草で、地方創生の仕事をさせて頂いて、上天草高校では、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（地域魅力化型）」の運営指導委員をさせて頂いています。さきほど小多委員が都会の大規模校の話がされましたが、私は地方の小規模校の魅力と言いますか、すごく地域の人の中にいて、今回のように他の高校と並べてみるという経験があまり私にはなくて、地域に入ったらそこにある高校や中学校と一緒に仕事をするというのが私のスタンスなので、そういう面から見ると、小規模校の方が地の利があり、生徒一人一人の魅力は作りやすく、逆に大規模校の方が厳しいのではないかと考えています。この課題の中に生徒の学力はもちろん入っているのだと思うのですが、例えば先生方のやりがいとか、地域から見た、この高校があって良かったといった評価なども聞いてみると、昨今は数値的な目標も多いのですが、適正規模の話ももちろん、もう少し質的な成果なども拾ってみないと、簡単に結論が出ないのではないかと思います。地域づくりは、本来的に時間のかかるもので、孫たちの世代で役立つぐらいの長いスパンで見ないといけないと私は教わっていて、10年程度で成果は出にくいというか、もちろん出していかねばいけませんが、生徒が学校を選ぶことができるということは、私はすごく素敵だと思うのですが、逆に言うと、郡部の地域にとってみると、学校は選ぶことができないので、そこにある高校と一緒にやっていくことが大事だと思います。よって、そういう質の評価のようなことをもう少し見ることができるとかということと、小規模校の魅力のようなことをもう少しこの10年でいろいろ改革していったあと、見てみたいなと思いました。

#### 【半藤会長】

○教育の在り様を変えることによって、主体的に地域で学びたいと思う環境をいかに作れるか、そこが大事なポイントだと思います。また、オンラインで繋がっています奥田委員はそのような活動をされていて、地域づくりに御尽力されていると伺っています。その立場から、地域で学ぶ人達あるいは地域で学ぶことの意味などをお話しいただければと思いますが、いかがでしょうか。

#### 【奥田委員】

○ありがとうございます。

今、田中委員からもあったのですが、生徒自身の成長を考えても、地域で学ぶことの意味は大きいのではないかなと考えております。

「今後の10年間の取組み」の叩き台で、どういう力を育んでいきたいのかというところに、個に応じた確かな学力等が書いてあると思うのですが、学力

というものが熊本県では、どのあたりを指しているのか。都市部の大規模校で進学に向けた力をつけることも、もちろん必要な一面ではあるのですが、もう一方で、非認知能力といわれる主体性や協働性、探究性、社会性などという力を育むには、やはり、地域の小規模校の中で生徒同士はもちろん、地域の多様な大人と関わるなかで、先生から教えられるだけではなく、自分たちで考えて行動する中でついていく力というものがあるのではないかと考えています。今回のコロナ渦の中で学校が休みになったときに、どんな生徒が学び続けることができていたのか、もちろん、先生方が学びを止めないための努力をたくさんされていたと思うのですが、生徒自身が動き出したという事例が、私たちが一緒に活動させてもらっている地域など、これまで地域で学んできた子たちの中にはたくさんいました。目の前の状況に対して自分は何ができるのかということを考えて行動していく力は、地域での探究活動や、実際に社会と関わる中で育まれているということが、今回のコロナの中でもすごく感じたところではありました。

また先ほど、質の評価というところがあったのですが、学習環境を整えるために整備計画を出されてきたということだったかと思うのですが、それぞれの学校の中での生徒の就職、進学等の率は横ばいという話が先程あったと思います。狭義の学力だけでない観点を含めて、各学校でどういう力が生徒に育まれているかも改めて見ていく必要があるのではないかと考えています。

#### 【半藤会長】

○ありがとうございました。

これからの高校の魅力づくりにかかる、そのようなお話にすでに踏み込んでいるところもございます。

#### 【吉永委員】

○いま、大きな観点からの話と高校の魅力化という点からの話に移ってきていると思います。4ページにあります学区制に関するところで、少し私が考えていることなのですが、平成22年に8学区から3学区に推移しました。その頃、私も現場で中学校に勤務していましたので、この年を境にして、子どもと親の意識が、私がいる県央学区では少し変化が生じてきたと思います。それまでは、熊本学区を受検するということになる、校区外から受検しますので、相当高いハードルがあったのですが、同じ校区ということで、子ども達の選択の幅が非常に広がり、喜ばしいことではありました。しかし、その頃から子ども達、もしくは親も含めての意識が、熊本市を向いているということは、当然の状態になってきて、もう10年ぐらい経っているわけです。併せて、最近の傾向を

中学校の校長と話をするると県立高校だけではなくて、中心部にある私立高校にも目が向いているという話を、今日、内村委員（ルーテル学院高等学校長）もいらっしゃいますが、私立高校に対する魅力化をかなり図っているのも、それに対する親の意識も非常に高まってきているという話をされます。

それに対して、県立高校は魅力化を打ち出していないかということ、そうではないようで、私が住んでいる近隣の県立高校は、町と一体となって相当努力をされています。しかし、現実はなかなか厳しいという話も聞きます。やはり少子化も相まって、郡部では県立高校が子ども達を奪い合うような、どこかが定員を満たせば、どこかが定員割れをするという現状もあるようです。

したがって今後の方向性としては、新たな学区の見直しはしないということになっていましたが、全県一区化した方が、本当はすべての子ども達の選択肢が広がりますが、定員割れの状況はさらに広がるかもしれないと個人的には心配しています。そのあたりの根本的な問題をどのように解消していくかということが、この会のあり方だと思うのですが、大変難しい問題であり、誰もが納得する結論はなかなか導くことが難しいと、今話を聞いていて思ったところです。

#### 【半藤会長】

○今の御発言は、議論になっている、再編整備等基本計画の成果と課題についてという資料にかかる、総括及び今後の方向については、肯定できるものの、県立高校の定員割れ問題については、総括とは別に、真剣かつ具体的なプランニングが求められるという意味であろうと理解したところです。

#### 【足立委員】

○すみません、最後にどうも少し違和感を感じているので、申しあげます。

産業教育振興会は、やはり産業の面から教育を見ているのですが、これまでのお話を聞いていると、教育の方からずっと見て頂いている。我々が最初に、熊本県経営者協会と連携することを始めて、出前授業ということで、もちろん生徒のためにもなりますが、産業サイドから見て、やはり生徒の優秀さを理解してもらうのにちょうどいいという考えで今もずっと続いています。

それから色々な研究発表会があるのですが、これについても教育関係者の方だけで今まで開催していたのですが、これももったいないということで、年1回新春の集いということで、200人ほど企業の人たちに集まってもらっています。高校生の皆さんが発表をするのですが、これについても、企業サイドの人たちは、自分の会社の社員よりもしっかりしているとか、発表は立派だとか、逆の形で熊本の教育を見てもらうという形で実施させていただいてきました。



ですから、そういうことで私の立場は役に立つのかなと思います。

というのは、これが文部科学省の仕事の一つなら、どうしてもこちらとしては経済産業省的な考えでアプローチをしていますので、例えば、先ほどのことでも、最近は変わってきていまして、GIGAスクールを文部科学省は一生懸命取り組んでいるのですが、経済産業省は未来の教室という形で、ICTを駆使して、これはだんだん一緒にはなってきているのですが、きっかけはコロナで、Withコロナで教育を見ていこうとしています。そういう意味では今後の課題として、せっかく今まで実施してこられた中で、不連続な形で出てくるものをどう取り扱われるのか、そういったものを少し課題として感じたところです。是非そのような観点もよろしくお願いします。

#### 【半藤会長】

○今後の魅力化づくりの中に、今の話は十分入れ込んでいくべき問題だと認識しています。

#### 【小多委員】

○魅力化は、次回以降も含めて、柱になると思うのですが、本日御提示いただいている資料で、ひとつ私が気になったのが、総合選択制あるいは単位制の学校の御説明のところです。

学校の特色を支える多様な選択科目、これについては生徒数の減少、ひいては先生方の減少によって、思うように選択科目が開設できていないという課題を挙げていたかと思います。ここについては、できれば議論するにあたって、学校の具体的な科目設定を、例えば開設当初はこういうねらいに基づいて設計をしたが、現実では、生徒のニーズや御専門の先生方の配置がかなわなくなって、開設ができていないという、より具体的な現状をお示しいただいたうえで議論をした方がよいのではと考えます。今後、総論的に魅力がある学校について議論をするにしても、現実的にはこうなっていますというところが、非常に悩ましいところかと思います。

その上で、より実効性の高い魅力づくり、先ほどから議論があったとおり、それが学校だけでかなわない部分があればと言うよりも、地域にいろんな可能性があり、それを小学校や中学校に求めていくような、高校がどこまで踏み込めるかみたいなのところもあるかとも思いますので、現状として少しここが気になりました。私も取材で小学校や中学校にお邪魔すると、地域の方ととてもうまく絡み合って、小学校の運営をされているところに何度もお邪魔したことがあります。選択科目の設定がうまくいっていないということについては、後日具体的なところをお示しいただいたけたらと思います。

もう一つ伺いたいことが、先日の報道で、文部科学省が高校の普通科再編で

学際融合や地域探究などのイメージを示して、再来年度から実際に導入をするという話が出ていたと思います。まだ不確定なところもあるかと思いますが、文部科学省の言っている普通科再編と、これまで熊本県教育委員会がなされてきた、普通科にプラスアルファで魅力づくりをされてきたところ、あるいは今後の可能性として視野に入れておられるところ、それをどういったものとして重ねて考えていいのか、全く別次元のことなのか、簡単に説明頂くと、国からも方向性が出ているとすれば、理解しておく必要があるのではと思ったところ です。

**【半藤会長】**

○事務局、お答えできる範囲で構いませんので、御発言頂ければと思います。

**【事務局】**

○小多委員がおっしゃったように、確かに中央教育審議会の特別部会で、現在協議されています。

それは普通科について、従来の普通科を学際融合学科という持続可能な開発目標やSDGsなど、現代的な課題解決を図る学科にすること。もう一つが地域社会の課題解決策を探る地域探究学科のようなものを作ったらどうかという案が出ています。

これにつきましては、先ほど話にあった、田中委員が関わっておられるような上天草市及び上天草高校では、地域との協働による学習探究活動を国から指定を受けて行っています。こういった地域との協働事業がベースになったものが、おそらく今言った地域探究学科に繋がるようなイメージだと思っています。

もう一つの学際融合学科も、本県におきましては、水俣高校でスーパーグローバルハイスクールの指定を受けて、グローバル人材を育てるということで、水俣ならではの環境という視点から、色々な取組みをされているところです。

したがって、そのような指定校の取組みが、ある程度ベースになり、このような話になっているのではないかと推測しています。よって全く別物を突然作るというイメージではないのではないかと考えています。

**【半藤会長】**

○よろしいでしょうか。お願いします。

**【牛田局長】**

○少し補足しますと、小多委員からありましたような、中央教育審議会の中に出てきていることは、先ほど事務局からもありましたように、国も研究指定校

としてやっていますし、私たちも同じ方向だということで、上天草高校をはじめとして実施しています。さらに本県は国に先駆けてスーパーグローバルハイスクールという、県独自の研究指定を始めていまして、国の地域との協働よりも先に、本県がスタートした全く同じ理念のものであります。地域の中で子どもたちが様々な学びをし、単に進学や就職の知識だけでなく、将来に繋がるような学びをするためには、地域の学校ならではのメリットを生かすということで、高森高校や、先ほど球磨中央高校の話もありましたが、スーパーグローバルハイスクールという県の指定を実施しています。これもまた、国が始めました地域との協働と全く同じだと思いますし、中央教育審議会で議論されていることも同じだということで、考え方はそういう意味では同じ方向であると考えています。

さらに、高等教育機関や国際機関等との協働体制のようなことも、中央教育審議会の先週の資料にあります。越猪委員もおられますが、熊本高校とも連携してWWLのようなことについても、本県としましても目指したいと思っています。高等教育機関との連携では、半藤先生もおられますが、先日、熊本県立大学との連携協定をリニューアルさせて頂き、さらに連携を深めていきたいところで、そういう意味では、すべてが同じ方向を向いていると考えています。

#### 【半藤会長】

○国が打ち出している普通科の改革については、私あるいは田中委員といった大学の人間から見ると、大学で試したものを高校で活用してみようというストーリーなのかなと思います。大学も800の大学をトップ30、それから地域型といった分類をして評価するというのでこれまでやってきました。その様子を見ながら、高校でもそれをうまく活用していこうということだと思いますので、そういう意味では、大学のこれまでの経験値を十分吸い上げながら、高校のあり方について考えていくことが一番合理的ではないかと思われまので、そのへんは密接に連携して取り組んでいくことが必要であると思っています。魅力的な学校づくりに向けて、これまでの総括をしっかりとっておこうということが本日のテーマですが、この総括の面について特に御発言ありましたらお願いしたいと思っておりますが、いかがでしょうか。

#### 【音光寺委員】

○先ほど吉永委員のお話にあったところですが、実際問題として、今の中学校から高校へ進学するにあたって、保護者等の考え方も含めると、私立の充足率が相当上がってきているということですが、この背景には就学支援金制度の影響が大きいと思っています。これまでは、私立高校は授業料等が非常に高く、

ハードルが高かったのですが、就学支援金制度ができて、授業料を全て国がみて頂けると、子どもたちや保護者の選択の幅としては、私立高校への選択の幅が非常に広がったというのが大きいと思います。そして、今本当に私立高校は魅力化を、生き残りもあるとは思いますが、色々な特徴を非常に前面に出されています。そういったところで、子どもたちが、この学校でこういう学習をしたいということに対して、現場にいますと、非常に丁寧に説明されているということが大きいと思います。

地元の高校につきましても、先ほどからあっているように、県立高校は卒業生の方が地元がたくさんいらっしゃいます。だから、地元を応援したいという保護者の方もたくさんいらっしゃいます。地域における期待度が非常に高いということです。しかし、再編整備で聞かれたことは、学校がなくなり、結局統合した学校が自分のいる所と相当遠くなった。そのようなときにどうやって学校に行くかということ、特に女子生徒については、自転車で通うことも大変で、公共交通機関などで行く場合、時間的な制約や、便数が少ない所は通学が非常に厳しい。それに対して私立高校は、スクールバスで家のすぐ近くまで、遠い所も1時間以上ある所までも来ていただける。そうすると、親としても通学が安心だという御意見も多く聞いております。通学方法等も、非常に影響しているのかなと、やはりJRがある所が、熊本市内に行く際に便利がいいということで、熊本市内を受検したり、熊本市内周辺の私立高校に行ったりという選択をされる方が非常に多いということが現状です。

また、県立高校がコミュニティ・スクールをされているということは、非常に良い成果だと思います。先ほど足立委員からありましたように、地域としては、私も菊池高校の運営協議会の委員に入っていますが、地域に貢献できるような高校生を期待されていますし、進学のみならず就職等も地域の産業に就職するということ、県立高校の一番の魅力は、地域で育てた子どもたちを、地域でまた活躍させようということだと思います。私たち中学校も地域の子は地域で育てるということで、自分の学校に誇りを持って、将来的には地域づくりに貢献できる生徒を育てようと、例えば菊池南中学校ではESD教育の研究指定も受けていますが、地域の産業ももう一回見直し、歴史文化も見直し、教育を再構築し、地域との連携をいかに図っていくかということを、県立高校がもう少しアピールして欲しいなということが、中学校側としての一番の思いです。特に菊池地域や県北地域などは、熊本市へも1時間圏内で通学できる地域ですので、そういった部分で、相当熊本市の中央の方に流れていると思われれます。

ぜひお願いしたいのは、中学校に毎年、進路決定の人数等を高校教育課が調査されていますので、それをもう少し分析して頂くと、どの地域に流れているかが見えてくると思います。ここ数年、私も現場にいまして、ここ数年相

当変わってきているというのが現状です。私が進路指導をしていたときの状況等とは、子どもたちも保護者の意識もずいぶん変わってきていると感じています。熊本市志向が根深いというのはあると思っています。

【半藤会長】

○今の件に関しまして、事務局何かございますか。

【事務局】

○音光寺委員が仰ったように、分析については、データとしては持っていますので、お示ししようと思います。

【半藤会長】

○資料については、いろんな活用の仕方があると思いますので、適宜有効に活用し、議論に載せていくことで御活用いただければと思います。

各委員から様々な御意見を頂きましたが、各委員の意識は、現代の危機感に基づいて、どういった将来像を作りあげるべきかというところに強い関心があるようです。

資料1につきましても、概ね特に問題はないと考えまして、さまざま御議論を頂いたことも踏まえて、改めて事務局にまとめ直していただき、再提案して頂くことにしたいと思います。よろしくお願い申し上げます。

それでは次の、魅力ある県立高等学校についての考え方及び今後の取り組みの方向性についての御説明を、事務局よりお願い申し上げます。

【事務局】

○それでは、資料3と資料4を使いまして、御説明を致します。

まず県立高校の魅力化を検討する上で、今回、中学生・高校生そして保護者の方を対象にアンケートを実施しました。その結果について、概要ではございますが、お知らせしたいと思います。

資料3の「アンケート調査結果概要版」という資料をご覧ください。調査は、今年7月から8月にかけて、県立高校の1・2年生を対象とし、2年生は保護者も対象としました。中学生は公立中学校3年生と保護者です。生徒と保護者は同一家族ではございません。なお、7月の豪雨災害の被災地となった地域の学校は対象から除いています。最終的な調査結果は、後日改めて御報告をしたいと思っています。

それでは2ページをご覧ください。「魅力ある高校とは」という設問に対する結果です。 の「希望する学科やコースがある」や、 の「進路指導が充

実している」はいずれも多い割合を示しています。その他の特徴として、の「地域に親しまれ、歴史と伝統がある」あるいはの「自分の住んでる地域にある」が高校生では10%前後増加している、ということが特徴として挙げられます。

続きまして3ページをご覧ください。「県立高校にあつたら行きたい学校、学科、コース」を聞いています。ちなみに3つ選択する質問となっています。特徴としましては、「高大連携を推進する高校」と「科学技術系の学科・コース」を選択した回答者が、いずれの対象でも多い割合を示しています。また、の「個人の学習状況に応じて、基礎から学びなおすことができる高校」は中学生・高校生とも、保護者に比べて生徒のほうが多く選んでいるという結果が出ています。

4ページをご覧ください。「高校の魅力・特色づくりのために、重視すべき視点について」です。こちらは中学生については、保護者のみにお答えいただいております。ここでは「情報化社会に対応した教育」を選んだ方が、特に保護者では、高校2年生と比べ4%高くなっているという特徴が出ています。

以上のことから、県立高校では、学校と地域の結びつきを重視する生徒の割合が増えているのではないかと。また、全対象者で高大連携や科学技術、情報化社会に対応した教育に対する関心が高いこと。基礎学力の定着を図るための教育に対するニーズも中学生・高校生ともに高いことなどが分かりました。

調査結果につきましては、今後さらに整理して、魅力化の方策に反映していきたいと考えています。

続きまして、今後の県立高校のあり方と魅力づくりについて、資料4で御説明します。表題の横に記載していますが、今回の検討会では「今後を見据えた概ね4年間の取組」ということで御協議いただくこととしております。なお、この部分は、事前に委員の皆様にお送りした資料を修正させていただいたものです。

まず資料の左上には再整備終了後の県立高校の状況を記載しています。特に一番下の「少子化の下げ止まり」ということで、当面は1万6千人超が続くということに触れています。

資料右上でございますが、こちらには「高校教育を取り巻く環境」ということで、社会の急激な変化、生徒の多様化、地方創生に資する地域と連携した学校づくりの必要性、あるいは下のほうには、国の動向として新学習指導要領の改訂や、先ほど話題に出ておりました中央教育審議会の動きなどを記載しています。一方、本県においても、現在、第3期教育振興基本計画いわゆる教育プランを策定中です。

こうした高校の現状、あるいは教育環境の変化を踏まえ、これからの新しい

時代に対応した魅力ある学校づくりの方向性を下半分に記載しています。

まず左側ですが、すべての高校生が夢に挑戦できる魅力ある県立高校像として、3つ挙げています。

まず1つ目は、「夢を実現する力」を育む学校。これは確かな学力の育成やグローバル化に対応した教育などを挙げています。

2つ目が「地域で夢を拓げ、地域の未来を支える人材を育てる学校」としています。地域に学び、地域で学ぶ教育を実践することで地域に貢献できる人材を育成していこうということです。

そして、3つ目が「夢への挑戦を支える学校」ということで、施設・設備やICT、教職員の資質向上といった教育環境の整備・向上も魅力化の大きな、重要な要素と考えています。

次に資料の中央に「魅力ある高校づくりに向けた取組の方向性」を「5つの柱」で記載しています。

1つ目は、県立高校ではそれぞれの学校に伝統や実績、特色があります。これらの強みを生かした取組みを重点的に行っていきたいと考えています。

2つ目が様々な校種・学科がある県立高校の強みを生かした、例えば、高校間連携を推進します。また、地域や大学、企業など多様なパートナーとの連携を進め、学校外の資源も活用して教育の充実を図っていき、高校の魅力づくりを面的に拓げていきたいと考えています。

3つ目はICTの活用推進です。新型コロナウイルスの感染拡大を通じて、ICTの活用による学びの保障の必要性が明らかになりました。遠隔授業や授業動画の配信により教育の充実を図り、個別最適化した学びや選択科目の拡大に繋がりたいと思っています。また交流機会を拡大し、協働的な学びへと拓げていきたいと思っています。

4つ目が小規模な学校の活性化です。高校が地方創生に果たす役割の重要性を意識しつつ、ICTやスーパーティーチャーの活用などにより小規模校における教育の充実を図っていきたいと考えています。

最後に、施設・設備の充実を含めた教育環境の整備にも取り組みたいと思っています。ここで記載しているICT活用のための整備については、既に整備に向け動き出しているところです。また今年度、学校施設の長寿命化プランを策定する予定で、このプランに基づいた施設の刷新をできるかぎり学校の魅力化と一体的に進めていきたいと考えています。

次にこうした取組みによって、高校生がどんなことができるようになるのか、具体的なイメージを資料の右側に記載しています。ここでは時間の都合上、細かな説明は省きますが、御確認いただき、魅力化のイメージを掴んでいただければと存じます。ただこの資料につきましては、あくまでもまだたたき台です。

これから皆様の御意見をいただいた上で、さらに検討を重ね、次回以降の会議でまとめていきたいと考えています。皆様からは忌憚のない御意見を頂ければと存じます。よろしく申し上げます。

【半藤会長】

○事務局から御説明をいただいた通りでございます。特に資料を読んで、今後の県立高校のあり方と魅力づくりについては、先ほど様々な御議論をいただいたところも、かなり反映されたようなものとなっています。次回に向けて是非、意見として出していただいて、修正すべきところ等がありましたら、そのあたりを率直に意見交換できればと思いますが、どなたでも結構です。なにかお気づきの点を御発言いただければと思います。

【夏木委員】

○先ほどの資料1の検討の中で、1学級の人数について触れられていた部分があったと思うのですが、長期的なスパンでは、学校編成が必要だと思うのですが、途中段階とか中期的な目標として1学級の人数の検討で、こちらは学びの質の問題や、1学級の人数が減れば資財も減るとか、経済的な面も含めて、検討する余地があるのか考えていますが、先ほど検討すべきとあった中で、今後の中には全く触れられていないのですが、検討する計画はあるのでしょうか。お聞かせいただきたいと思います。

【半藤会長】

○事務局お願いします。

【事務局】

○1学級の定員については、先ほど中高一貫のところでは少しだけ触れさせていたおいておまして、それについては今回、資料4の中には盛り込んでおいません。委員がおっしゃっていることは、全体的なプランがあるかどうかということかと思われませんが、少人数化につきましては、各高校から要望としては非常に高いというのが事実です。私どももそこについては、全く検討していないということではありませんが、一応、現在の国のルール上で言うと、40人1学級に先生がついてくるという形になっており、そこの兼ね合いと、少人数化した場合に、どれだけ先生の数が減るかというところが、研究はしていきたいとは思っています。しかし、プランの中にそれを盛り込むと言われると、若干厳しいのかなと考えています。



### 【半藤会長】

○学級定員と教員の数等は、経済的なものも含めて、色んなことを考えなければいけないと思いますが、少人数の適正化については、教員側の見方と学生・生徒たちからの見方が、必ずしも一致しないことがあります。教員はなるべく少人数が良いと言うのですが、案外、学生たちは、色々な友達と触れ合う希望を求めているようなところもあり、「少ないのが幸せだ」と必ずしも思っていないところもあります。アンケートもとられていますので、そういった見方も踏まえながら考えていく必要があります。そういう認識を持ちながら、この資料4を作り上げていけばいいのではないかと考えております。他に何かご意見・ご質問がありましたらお願いします。

### 【田中委員】

○魅力ある高校づくりに向けた取組の方向性について、1つ目に挙げられている「学校の特色や強みを生かした取組」については、非常に私は良いなと感じています。特色が、金子みすゞさんの「みんな違ってみんないい」のようなものだとして理解しています。それぞれに伝統とか歴史があって、その地域の人たちの思いもあって、そういったものを、連携などを生かしながら強みを磨いていくということで2番目に挙げられています。

今回人吉・球磨地域は大変なことになっていますが、川ということでは、熊本は1級河川が4本、北から菊池川、白川、緑川、球磨川があり、それぞれが独自の暮らしを作り、地域の産業や伝統などを学びながら、それぞれの風土をつくってきました。もう1つ提案したいことは、熊本地震からの学びを反映できないかなと思っています。最近、災害が頻発していますが、高齢化、高齢社会が迎えた災害として、熊本地震からの学びは、実は全国の学びでもあって、これからを担う熊本の若い人材が自分たちの地域で学ぶということは、そういったことも学べるのではないかと考えています。暮らしの一安全を作っていくことも1つだと思っていますので、地域の風土を学ぶことを、1つ目に挙げていただいていることは非常にありがたいと思いました。

### 【半藤会長】

○他に何かご発言がありましたらお願いします。

### 【音光寺委員】

○魅力ある高校づくりの取組の方向性の4つ目に、「新しい学校、学科、コースの設置検討等」があるのですが、高校の話聞けば、なかなか新しい学科等の申請をしても難しいと教育委員会に言われるという現状があるようです。

校長先生方も2年、3年で異動されますが、学校の強みを生かすということで、特徴があっても、もっと特徴を出したいといったときに、なかなか制限があつてできませんという御意見も聞いていますが、ある程度緩和できるようになるのでしょうか。

【半藤会長】

○事務局いかがでしょうか。

【事務局】

○いろいろと御意見は高校からいただいておりますが、一概にだめということではありません。ただし、一旦作ってすぐ閉じるということはありません。それはいけないことだと思いますので、やはり出口の部分や、どれだけ時代にマッチしていくかなど、色々なことを勘案しながら考えていくべきことではないかと思っています。提案されても絶対だめですよということではないと思います。

【半藤会長】

○他にご発言ありましたらお願い致します。

【末次委員】

○魅力ある高校づくりに向けた、中央の部分ですが、大きな・・・の中で、「ICT活用」という言葉が全てに出てきているのですが、すべてに同じような内容が入っているので、もう少し凝縮されて、少し精査されたほうがいいのではないかと思いますので、御検討いただくとありがたいです。

【半藤会長】

○ICT関連について、少し重複しないように整理してもいいのではないかとことです。事務局はそのあたりを踏まえて、お作りいただければと思います。他にお気づきの点がありましたらお願いします。

【小多委員】

○おおもとのところを確認するようなものですが、ここでいう県立高校には、特別支援学校は含まれず、議論の対象ではないと理解はしていますが、現状として、色々見聞きする中では、小中学校で特別支援学級・特別支援教育が非常に必要性が高まっていて、対応がどんどん拡大され、充実してきている部分も踏まえ、現実的に県立高校でもそういう対応が必要な生徒もいて、実際、熊本

県教育委員会でも随分前からそういう取組みをされているかと思います。

本日の資料1の中高一貫校のところで、これはどういうニュアンスが分かりませんが、「個別の支援を必要とする生徒への対応」という項目があり、見たところ中高一貫教育校のところにあったのですが、進学校といわれるような学校でも、発達障がい等のサポートが必要で、超難関大学と呼ばれるような学校でも、そういったサポートの必要な学生がいて、専門部署をつくっていることはもう随分前からのことかと思います。進学校普通科の高校であれ、あるいは専門科目のある農業高校であれ、いずれにしろ、いろいろな特別支援教育的なサポートがいる部分は非常に求められている部分もあり、それは私が理解するには、組織的に動いている部分もあるとは思いますが、それぞれに理解を深めて対応をされている部分もあるとは存じあげていますが、さらに組織的なところで、今回こういった議論をしていくとすれば、そういった個別のサポートが必要なところの丁寧な教育といった観点が、今求められているところであり、特別支援学校と分けて考えるという次元でないことは、現場の方、皆さんが一番分かっておられると思うので、そういった観点が必要ではないかと感じています。

【半藤会長】

○事務局から何かご回答ありますか。

【事務局】

○今、確かにおっしゃった通り、私どもが対象としていることが多様な生徒への対応ということの中に、そういった観点は入れているつもりです。この資料の中には入っていないのですが、特別支援学校そのものを対象にということではなく、入学者の中には支援を要する方が必ずいらっしゃるもので、そのような学校現場が非常に苦労されているという話や、対応に苦労されているということは聞いていますので、そういったことへの対応ということは、視点としては入れているところです。

【半藤会長】

○はい、大変良い意見をいただいたと思っております。高校の魅力化づくりは、どうしても華やかな議論になりがちですが、学びの持続に向けた取組みが、実は見えにくいところで学校の魅力づくりに大きく貢献するものだろうと思いますので、今のご回答があったようなところを、強調していただいてもいいのかなと思っています。また同じ観点でいえば、特に地域の学校では、学校を核に

した地域づくりのようなものも、これからどんどん活性化すると思いますが、これにはおそらく、田中委員も奥田委員も異議はないと思いますが、学校だけで成り立つものではなくて、地域の全面的な支援、協力あるいは熱意が是非とも必要です。それがあってこそ、地域の学校の魅力づくりはできると。つまり地域全体が、高校を取り巻く地域全体が、当事者意識を持つことが大事で、教育関係者あるいは生徒、あるいは父兄だけの発想では、魅力は成就しないということだろうと思っています。そのあたりが見えるような、メッセージとして伝わるような、そういう発信が必要であろうとも考えたところです。このあたりは深掘りをしますと、時間がなくなってしまいますので、本日は一応、いただいている意見を踏まえて、事務局には是非、次回までにまとめ直しをしていただき、それを踏まえてより突っ込んだ議論をしていただければと思っています。

それでは最後に、特に御発言ないようでしたら、本日の議事はこれで終了とさせていただきます。それでは事務局お願いします。

#### 【事務局】

○委員の皆様、大変お世話になりました。本日いただきましたご意見につきましては、次回検討会までに事務局でまとめさせていただきます、再度お示しできればと考えています。それでは、その他にうつります。事務局よりお願いします。

○それでは、次回予定しております学校視察についてご説明します。

資料5をご覧ください。学校視察では、特色ある学校づくりに取り組んでいる県立高校を訪問し、今後の協議に生かしていただきたいと考えています。

実施時期としましては10月中旬を予定しています。視察先は熊本西高校と球磨中央高校の二校です。熊本西高校では、今年度から理数科を改編したサイエンス情報科で、高大連携や先進的な情報科学についての学びを取り入れることなどにより、科学系人材の育成に取り組んでいます。また体育コースやeスポーツなど部活の現状も視察のポイントとしています。

また、球磨中央高校では地域との連携による学習活動について、再編統合により新設された地域未来探究科や総合的な学習の時間における球磨地域学などの取組みを視察したいと考えています。

当日は借上バスでの移動を予定しており、午前中に球磨中央高校、午後に熊本西高校という日程を予定しています。

なお、視察と第2回の検討会の開催日につきましては、委員の皆様、先に日程を照会させていただいています。事務局への御連絡が、まだお済みでない

方はこの後、職員にお伝えいただきますと幸いです。

第2回目の検討会は、10月の下旬を予定しています。どうぞよろしくお願い致します。

○それでは予定していた内容は以上です。委員の皆様から何かございませんでしょうか。

それではこれもちまして、第1回県立高等学校あり方検討会を閉会します。委員の皆様、長時間にわたり、大変お世話になりました。ありがとうございました。